

いのち 生命のにぎわいとつながり

No.52

平成29年3月

日本海側では立春を過ぎてても大雪が降り続き、人々の生活に大きな影響が出たことは記憶に新しいところですが、3月に入り目に映る景色も色鮮かになってきました。生命のにぎわい調査団員からも県内各地の「春」を知らせる便りが続々と届いております。

本号では、ミヤコタナゴの回復に向けた取り組みを紹介するとともに、絶滅の恐れがある房総のヒメコマツの現状を知っていただくための観察会や市町村職員の生物多様性に関する研修会の開催結果についても報告します。

千葉県におけるミヤコタナゴの回復に向けた取組 ～ 美しいふるさとと小さな宝物を未来に残すために私たちにできることを考える ～



図1 ミヤコタナゴ（オス）と淡水魚保全シンポジウムでの千葉県内の小学校3校の発表の様子

コイ科タナゴ亜科に属する体長3～5cmほどの小さな美しい魚、ミヤコタナゴ。本種をはじめとした絶滅の危険性の高い淡水魚類の保全を推進していくことを目的として、平成29年1月19日に、いすみ市大原文化センターにおいて「淡水魚保全シンポジウム～ミヤコタナゴが住む美しいふるさとを未来へ～」を開催しました（図1）。当日は、秋篠宮文仁親王殿下の御臨席のもと、433名の皆さんと「ミヤコタナゴと美しいふるさとを未来に残していくために取り組まなければいけないこと」について議論しました。

本報では、ミヤコタナゴの現状とこれまでの取組だけでなく、今後、本種を保全していくために私たちができることについても御紹介します。

CONTENTS

- 1 千葉県におけるミヤコタナゴの回復に向けた取組 1
- 2 房総のヒメコマツ観察会を開催しました 3
- 3 生物多様性に関する市町村職員研修会を開催しました 4
- 4 カミツキガメの防除専門職員を採用しました 4
- 5 千葉県の希少種（カワスナガニ） 4

ミヤコタナゴは、かつては池沼や河川、水田の中の深み（おっぼり）などの私たちの身近な場所に生息していた「普通の淡水魚」でしたが、生息環境の悪化や外来種の影響などにより、現在では千葉県内の4市町（茂原市、いすみ市、勝浦市及び御宿町）と栃木県の限られた地域に生息するのみになってしまいました。そのため、本種は環境省や千葉県のレッドデータブックなどにおいて「絶滅危惧種」に選定されているだけでなく、文化財保護法に基づく「天然記念物」、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）に基づく「国内希少野生動植物種」に指定され、保護されています。

千葉県ではミヤコタナゴを絶滅の危機から救い出すために、平成6年度から様々な取組を進めてきました。しかしながら、取組を進めていく中で、この小さな魚を守るためには様々な課題があり、それを解決することが簡単ではないことが分かってきました。

●ミヤコタナゴが減少した原因

減少した最大の原因は、1960年代以降の農業の近代化や開発などの影響であると言われています。圃場整備や河川改修により、かつての生息地にはミヤコタナゴと産卵に不可欠なイシガイ類（図2）が生息できなくなってしまいました。また、外来魚による捕食や競合、違法捕獲（密漁）による影響も軽視できません。

このように、ミヤコタナゴの減少した原因は全て「人間活動の影響」によるものなのです。



図2 ミヤコタナゴが産卵するイシガイ類

●関係者によるミヤコタナゴの保護活動

このような状況に歯止めをかけるために、県を含めた関係者が協力してミヤコタナゴの保護活動を進めてきました。具体的には、現在の生息地において本種の絶滅を回避するための生息環境の整備・改善や系統保存（人工増殖）を実施してきました。

また、地域で本種の保護に携わっている「御宿町ミヤコタナゴ保存会」などと連携して、生息地を復元する取組の支援・協力を行ってきました。しかし、このような取組は限定的であり、県内に複数箇所ある本種の全ての生息地で十分な対策を講じることができてきた訳ではありません。

●ミヤコタナゴの保全上の課題

ミヤコタナゴの保全が難しい理由として、次の3つが挙げられます。

（1）生息環境の維持が困難

水路の草刈りや泥上げなどの維持・管理作業が行われなくなったことにより、ミヤコタナゴとイシガイ類に適した環境が少なくなっ
てしまいました。

（2）違法捕獲（密漁）が行われている

ミヤコタナゴの生息地において、所有者が不明な漁具が仕掛けられているとの通報を受けることがあり、違法捕獲（密漁）の影響が危惧されます。近年では、産卵に必要なイシガイ類の密漁も確認されており、深刻な問題です。

（3）活動が少数の関係者に限定されている

密漁防止の目的などから、生息地を公表・公開できないため、限られた関係者で保全活動を進めなければいけませんが、関係者の数が少ないことなどによる問題が生じています。

●シンポジウムの開催

そこで、ミヤコタナゴと保全活動の現状を知っていただくことを目的として、平成26～28年度に計3回のシンポジウムを開催し、県内外から計688名の皆さんに参加していただきました。

今年度の淡水魚保全シンポジウムは、望月 賢二会長（千葉県立中央博物館・元副館長）を中心に、行政、地域の自然保護関係者と研究者で「ミヤコタナゴ保全シンポジウム実行委員会」を組織して開催しました。

3回のシンポジウムでは、16名の専門家の皆さんからミヤコタナゴをはじめとした各地の絶滅危惧種の保全の先進事例を御紹介いただきました。

特に、今年度のシンポジウムでは「ミヤコタナゴを活用しながら保全していく方法」を主題に、「絶滅危惧種のシナイモツゴを活用して地域ぐるみでの保全に成功している事例」について、NPO法人 シナイモツゴ郷の会副理事長の高橋 清孝氏から、御紹介いただきました。また、(株) ラーゴ生物多様性研究室長/岡山淡水魚研究会の阿部 司氏から、「地域の理解者を増やしながらか絶滅危惧種のアユモドキとスイゲンゼニタナゴを保全していくための秘訣」を御紹介いただきました。

また、千葉県内の小学校3校（茂原市立新治小学校、いすみ市立国吉小学校及び御宿町立御宿小学校）の児童の皆さんから、各校での取組を踏まえ、「ミヤコタナゴを未来に残していくためにできること」について、発表していただきました。

シンポジウムの総括として、森 誠一氏（岐阜経済大学）を中心に「ミヤコタナゴをどのように活用し

ながら保全していくか」について総合討論を行いました。太田 洋 いすみ市長、望月会長、ならびに宇田川 晴男氏（御宿町ミヤコタナゴ保存会）から「地域経済と環境保全の両立を目指した取組を目指すこと。それを担うことのできる人材を育成すること。」の重要性と展望についての提言がありました。会場の皆さんとの議論の中で、このような活動を進めていくためのプラットフォーム作りを今後、どのようにして進めていくかについての課題が提起されました。

これらのシンポジウムを通して、県民の皆さんにミヤコタナゴや絶滅危惧種の保全について関心を持っていただくことは、今後、ミヤコタナゴを回復させていく上で重要な第一歩であると考えています。



図3 淡水魚保全シンポジウムの総合討論

●ミヤコタナゴと美しいふるさとを未来に残していくために

ミヤコタナゴを残していくためには、協力者を増やす必要がありますが、残念ながら、密漁防止などの目的で生息地が公開できないため、現状では協力していただく場所や体制がありません。そのため、今後は、ミヤコタナゴの保全に協力していただける「場」を作るために、ミヤコタナゴを回復させるための計画や、保全していくための体制作りを進めていきます。

また、県では、ミヤコタナゴやイシガイ類の過去の生息状況を調査するためのアンケートを実施します。このアンケートをもとに、ミヤコタナゴの生息域を回復させていくための活動を展開していく予定です。アンケートは生物多様性センターのウェブページからも参加いただけます。ぜひ情報をお寄せください。

生物多様性センターでは、私たち人間とミヤコタナゴがともに生きていくことのできる美しい里山を未来へ残していくために、今後も様々な活動を展開していきます。ウェブページなどを通して、今後もミヤコタナゴの保全に関する様々な情報を発信していきますので、ぜひ、御覧ください。

(鈴木 規慈 千葉県生物多様性センター)

房総のヒメコマツ観察会を開催しました
平成28年12月3日（土）

千葉県の絶滅危惧種ヒメコマツ保全事業の一環として開催している観察会も、今年で7回目となり、12月初めに清和県民の森とその周辺のヒメコマツ自生地で開催しました。講師を藤平量郎氏（房総のヒメコマツ研究グループ代表）と、尾崎煙雄氏（千葉県立中央博物館 主任上席研究員）にお願いし、参加者はヒメコマツ系統保存サポーターを中心に、千葉県ヒメコマツ保全協議会、自然保護課・生物多様性センター職員の総勢26名でした。

出発してすぐに急な山道を登り、しばらく尾根道を歩くと最初の観察地点です。2年前に突然枯死してしまったヒメコマツがまだ少し枯れ葉をつけたまま立っていて、こんな大木でも簡単に枯れてしまうのかと皆、驚いていました。

さらに見晴らしのよい尾根を南下し、急な斜面を木につかまりながら下ります。岩にしがみつくように曲がって生えた大きなヒメコマツや、一昨年ようやく樹高130cmを越えて一人前のヒメコマツとして数えられるようになった若木、そして尾根にまっすぐ高くそびえたつヒメコマツを見て、講師のお二人から千葉県のヒメコマツの概況について聞きました。足元に時折あるヒメコマツの小さな実生（みしょう）を踏まないように注意しながら見晴らしのよい尾根に戻り、房総丘陵の、標高は低くても起伏に富んだ山並みを眺めながら、昼食と記念撮影をしました。



ヒメコマツ観察会参加者（清和県民の森）

参加者のアンケートを見ると「紅葉がすばらしくベストタイミングだった。ヒメコマツを見るのはこんなに歩かなくては行けないのかとびっくりした。」「絶対個人では行けない場所へ案内してもらい、本当にありがたかった。」等、満足していただけたようです。来年度も引き続き観察会を実施する予定ですので、ヒメコマツの実状に関心をお持ちの方は、ぜひ御参加ください。

(御巫 由紀 千葉県生物多様性センター)

生物多様性に関する市町村研修会を開催しました

生物多様性に関する市町村職員研修会を平成29年1月25日(水)に県立中央博物館で開催し、生物多様性を担当する多くの市町村職員の皆様に御参加いただきました。

本研修は、街づくりの主体である市町村の方々に、生物多様性への関わりについて理解を深めてもらうことを目的に毎年開催しています。

今年度は、「生物多様性の保全と市町村の関わり」のほか、本県でも大きな問題となっている「外来生物への取組」や、県内では多数の地域で見ついている「セアカゴケグモ対策」について研修を行いました。

外来生物の定義や、在来種・環境への影響などの説明に加え、特に特定外来生物として問題となっているオオキンケイギクの防除の方法や、人への危害が懸念されるカミツキガメやセアカゴケグモの分布状況、発見時の対応方法等について説明を行いました。

市町村は住民に最も近い窓口であり、参加された方々の外来生物への関心は高く、研修終了後も多くの質問があるなど関心の高さがうかがえました。

(東海林 智之 千葉県自然保護課)



セアカゴケグモの説明を聞く参加者

カミツキガメの防除専門職員を採用しました

県では、特定外来生物カミツキガメの防除のため、平成29年2月1日にカメ類の生態に精通する職員と防除事業に専念する嘱託職員を採用しました。印旛沼流域のカミツキガメの根絶に向けて、効果的な捕獲方法の開発やこれまで捕獲が行われていなかった越冬期(11~3月頃)の捕獲作業等を目指します。

(酒井 さと子 千葉県生物多様性センター)



今津健志技師(左)と加藤留吉嘱託(右)(イラスト:高山順子)

千葉県の希少種

カワスナガニ

(千葉県レッドデータブック:最重要保護生物A)



この写真の中に、何匹のカワスナガニを見つけることができますか?

カワスナガニは、甲羅の幅が1cm程度の小型のカニです。川の河口付近で潮の干満の影響を受ける範囲を感潮域とよびますが、その中でも一番上流側で、しかも礫がごろごろしている川底に生息しています。網ですくい上げると、礫とよく似た色合いでじっとしており、目立つことのないカニです。

カワスナガニは、千葉県から沖縄県までの範囲に生息する日本固有種です。県内の個体群が本種の北限となりますが、生息場所は限られており、個体数もとても少ないです。

本種は、県のレッドデータブックでは最重要保護生物(A)であり、また複数の都道府県版レッドデータブックでも保護が必要な種として選定されています。環境省のレッドデータブックでは「情報不足」というカテゴリーで扱われていた時期もありましたが、平成26年に発行された最新版では、準絶滅危惧種(NT)に選定されています。

日本各地のカワスナガニ個体群の遺伝子を調べた研究によると、地域集団間の交流がとてもなく、遺伝的な違いが大きいということが明らかになっています。そのため、地域ごとの集団をそれぞれ保全する意義が特に大きい種であることがわかります。

先に、礫のある川底に生息すると書きましたが、実際に調べてみると、そのような環境の中でも非常に限られた範囲に偏って生息している様子が伺えました。この目立たない、物云わぬカニが選りすぐった環境を、将来にわたり残していきたいものです。

(冒頭の質問の答えは、オス1匹とメス2匹です)

(高山 順子 千葉県生物多様性センター)



生物多様性ちばニュースレター No.52 平成29年3月31日発行

編集・発行

千葉県生物多様性センター(環境生活部自然保護課)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2(千葉県立中央博物館内)

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <http://www.bdcchiba.jp>